

自分の考えを持ち、表現する力を育てる「読むこと」の授業(第一年次) —言語活動を核とした単元構想の工夫を通して—

長期研究員 車田 敦子

I 研究の趣旨

2009年までのPISAの調査結果や平成24年度の全国学力・学習状況調査の結果から、文章の内容等について自分の考えを持つことに課題があることが明らかになった。小学校学習指導要領国語では、自分の考えの形成及び交流に関する指導事項が全学年を通して新設されており、「読むこと」の指導では、書かれている内容を理解する力だけではなく、書かれている内容を基に自分の考えを持ち表現する力の育成も求められている。

これまでの「読むこと」の文学的文章の授業を振り返ると、自分の考えを交流させるが、それを生かして自分の考えをまとめさせるということへとつなげることができていなかった。

そこで、子どもたちが自分の考えを持ち、友だちとの交流を通し、考えを表現していく力を育成する「読むこと」の授業について研究することとした。

II 研究の概要

1 研究仮説

「読むこと」の指導において、以下の手だてを講じれば、子どもが、読み取ったことを基に自分の思いや考えを明確に持ち、話したり文章として書いたりできるであろう。

【手だて1】 目的を持って意欲的に読むことができる言語活動を工夫した単元構想

【手だて2】 「読む」「考える」「書く」「伝え合う」活動の効果的な位置付け

2 研究の内容

以下について、研究協力校の第5学年104名（3クラス）を対象に授業実践を行い、検証する。

(1) 言語活動を工夫した単元構想

子どもたちが目的意識や課題意識を持って自分から進んで文章を読み、自分の考えを持ち表現していけるような単元を構想する。単元における付けたい

力を明確にし、その力の育成にふさわしい言語活動を単元全体を通して位置付ける。その言語活動が、自分で読んで考えたことを書き、伝えることへとつながるよう工夫する。

(2) 「書く」活動等の効果的な位置付け

読んで考えたことを書くことで自分の考えを明らかにし、伝え合い、さらに深まった考えをもう一度書くという活動を、1単位時間及び単元全体の中に位置付ける。それらを繰り返し経験させることで、子どもたちに、理解したことを基に自分の考えを表現する力を育成する。

3 研究の実際

(1) 授業実践 I

単元名 「物語の構成を意識して『物語のとびら』

(図1)を作ろう」

「物語のとびら」は、物語の構成や物語全体の変化を意識したり、部分と部分とを比較したりできるという特徴を持つ。物語の構成や、場面の展開に即して人物の心情の変化を読み取り、自分の考えをまとめる力の育成にふさわしいと考えた。

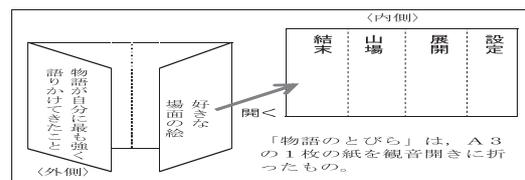


図1 物語のとびら

本実践においては図2のような単元を構想した。

付けたい力	物語の基本的な構成をとらえ、場面の展開に即して人物の心情の変化を読み取り、自分の考えをまとめる力	
教材	主教材『世界でいちばんやまいましい音』	関連教材『スイミー』
単元を貫く言語活動	物語の構成を基に、物語が自分にも最も強く語りかけたことを「物語のとびら」にまとめる。	
単元構想	西側	実践内容
一	1	・ 教師自作の「物語のとびら」を読み、物語の構成を基に、物語が自分にも最も強く語りかけたことを書くという学習に関心を持つ。 ・ 『スイミー』を読み、物語の基本的な四つの構成「設定」「山場」「結末」について理解する。
二	2	・ 「山場」はどこかを話し合い、物語で最も大きく変わったことを「物語のとびら」に書く。
三	3	・ 「設定」と「結末」を比較し、物語の何がどのように変わったのかを「物語のとびら」に書く。
四	4	・ 「展開」部分の役割を考え「物語のとびら」に書く。
五	5	・ 物語の構成を基に、物語が自分にも最も強く語りかけたことを「物語のとびら」にまとめる。
六	6	

図2 単元構想

第一次では『スイミー』を基に、物語の基本的な構成について学習した。第二次では、その学習を生かし『世界でいちばんやかましい音』の構成をとらえ、根拠となる言葉や文、そこから考えた登場人物の心情などを「物語のとびら」の内側に書いた。第三次では、読み取ったことを基に「物語が自分に最も強く語りかけてきたこと」を外側にまとめた。子どもたちは、教材を何度も読み返しながら、自分の考えを表現していた。一度読んだ時にははっきりしなかった考えが、何度も読み、書いていくうちにまとまっていったのだと考えられる。

(2) 授業実践Ⅱ

単元名 「伝えよう！私にとっての物語の魅力

～『おはなしタイムカプセル』で未来の自分へ～

「おはなしタイムカプセル」は、物語のおもしろさを大人になった自分へと書いた文章である。大人になった自分ももう一度読むので、より深く考えた文章にしたいという意識を持たせることができる。表現の工夫など優れた叙述に対する自分の考えをまとめる力の育成にふさわしいと考えた。

以下の図3のような単元を構想した。



図3 単元構想

第二次の授業においては、なぜこの物語がおもしろいのかを考え、根拠を明らかにしながら友だちと伝え合い、また考えてノートに書くという学習を繰り返していった。「おはなしタイムカプセル」には次のような記述が見られた。

この物語には「現実」の間に「非現実」があるサンドイッチのような構成のおもしろさがあります。非現実が入ることによって予想もできないことが始まり、どきどきする展開になっています。(D男)

最後の文から、この物語はハッピーエンドなのかという疑問がうかび、みんなで話し合いました。ハッピーエンドだという友だちもいましたが、私はちがうと感じました。なぜなら二人の顔は紙くずのようになったままだったし、命が助かったことには賛成ですが、命令口調で悪いままだったからです。(M子)

これらからは、子どもたちが授業で学習したことを生かしながら書いたことが分かる。また、事後のアンケートでは、「友だちと話し合うことで自分の考えが広がったり深まったりする」と79%の子どもが回答している。友だちとの交流を通して考えが深まったり、根拠を持って話すことで納得できたりするという経験ができたのだと考える。

子どもたちは、これらの学習を通して、構成や表現の工夫などに目を向け考えながら読むという、彼らにとっては新しい読み方を獲得し、自分の考えを書くことができた。また、普段は書くことを苦手としている子どもたちも、授業中に書きためたノートを読み返したり、友だちと話し合ったことを基にしたりしながら文章にすることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 目的を持って読み、表現できる言語活動の工夫

単元における付けたい力を明確にし、その力とつながる言語活動を単元を通して位置付けたことにより、子どもの興味・関心を引き出し、目的意識を維持しながら言語活動へと向かわせることができた。そして、読み取ったことを基に自分の考えを表現することにも効果的に結び付けることができた。

(2) 考えを広げ、深める活動の組合せ

自分の考えを明らかにするために書き、それを伝え合い、もう一度書くという活動の組合せにより、子どもたちの考えが広がり、自分の表現に生かしていくことへとつながっていくことが分かった。

2 今後の課題

自分の考えの変容を十分に実感できない子どもも見られる。考えの深まりをより実感させたい。考えを深めるために子ども同士の交流を充実させ、考えをまとめる時間を確保していく。その上で、考えの変容をより感じさせられるような手だてを探りたい。